Addie Gingold

JAPN 320S

Professor Saito-Abbott

December 1, 2015

Final Essay

**授業案と経験**

 ９月２５日から今までDel Rey Woods小学校への活動を行った。グループメンバー二人と一緒にやったが、毎週子供の人数が代わってしまい、私たちは大変心配だった。何人が参加してきても、楽しそうなアクティビティを作って頑張った。体を動かすのはに対して、動物の鳴き声やオノマトペのジェスチャーゲーム、体遊びの歌、箸の使い方レッスン等をして、美術のに対して、秋のテーマの折り紙、鬼の面、ありがとうカード等を作る活動をした。人数が７人に減ったり２０人に増えたりしたので、5・6人ずつの小さいグループに分かれてアクティビティを行ったため、チームワークを養うことができた。

**Outcome 1: 自己と社会意識**

 取り残されたグループに入っていても、私たちは持っているアイデンティティを使うなら似た者とコミュニティや絆を作るはずだ。サービス先で、日本の言語と文化を教えながら生徒たちの文化や経験を考えて日本語のレッスンで習ったことと接点を決めて頑張っている。例えば、サンクスギビングのありがとうカードを作ったところで、私のグループには家でどうやってサンクスギビングを祝うかと日本はどうやってそのことが違うかを相談した。生徒たちは日本にサンクスギビングのような祝日がないか知らなかったので、サンクスギビングの期限、また、自分の文化について勉強になったそうだ。サービスアクティビティには、アイデンティティや自己認識とは何か、どのグループに入っているか、また権利と疎外とは何かを理解できるようにする。

 その以外、自分が持っているアイデンティティは何かや自分からどのように社会が見えるかを理解することは重要だ。そして、サービスラーニングの授業中とサービス先で日本語のレッスン中に自分がどのような特権を持っているか、どのような方法で疎外されているのかを理解して話して頑張った。生徒たちの全員はアメリカに育ったヒスパニック系の人なので、日本語のレッスンに入って至急に他文化の尊敬し方を分かるようになった。例えば、Del Rey Woods小学校にはじめて来たところ、生徒に日本に犬を食べるように聞いてもらったが、その質問は飢饉や貧困について話になった。

**Outcome 2: ボランティア 活動と社会的責任**
 個人は自分のアイデンティティを決めたら、集団、コミュニティ、社会に入れば、自分の経験や考え方を使って社会を手伝えるそうだ。もし私たちが幸せで豊かなら、個人は良いグループを作るために、違う経歴を持つ人たちとよく働く。もしそのグループがよく機能すれば、私たちは良い共同体を作ることができるし、もし共同体がよく機能すれば、良い社会を作ることができる。

 さらに生徒への理解力をえるために、サービスラーニングの一員として私たちは個人と共に働く。しかし、生徒たちはさらに他の人たちに影響をあたえることができる。また、異文化を学んだことのある人として、より平等で公平な社会をつくろうと挑むのは社会的責任だと示さなければいけない。生徒はこれから日本の興味を持たなくても、異文化について学んだので、自分の経歴と違う人に会えばその違いを尊敬するはずだであり、私のサービスでも日本の文化についてアクティビティだけではなく、生徒たちと異文化のことを相談した。

**Outcome 3: コミュニティと社会的公正**
 生徒たちのバックグラウンドがどのように彼らへの対応に影響しているのか、学校でどのように生徒が役割をはたすのかを話す。Del Rey Woods小学校の大多数がヒスパニック系でバイリンガルのことはメリットみたいが、宿題をするとき集中力が持たなくて、そもそも宿題を理解できていない子もいる。そして、多くの生徒が貧しくて、これは彼らが教育とその補佐を必要としている、ということをしめしている。私たちの学校は裕福な地域にあるけど、生徒たちは恵まれていないと考えられている。その地域は多くが白人がいるが、生徒たちはいろんなバックグラウンドで育っている。

 コミュニティの中の問題が生徒にとって学校生活を不平等にさせる。もしCPYの生徒たちに両親のように英語話者がいなかったら、彼らはアメリカ出身の両親をもつ生徒よりさらに不利になる。私たちにとって、周縁化と生徒やコミュニティへの効果について勉強したら、どうやって異文化や自分と違うアイデンティティを尊敬するかを分かるようになり、生徒に教えられるそうだ。先書いたが、生徒に日本に犬を食べるように聞いてもらったが、その質問は飢饉や貧困について話になった。あの時から今まで、日本で犬を食べるというの質問を聞いていない。

**Outcome 4: 多文化コミュニティーの構築と市民参加** 異なった背景をもった子供たち、私たち、CPYなどの組織から、生徒達は平等かつ持続的な多文化社会づくりについて学び、それらに貢献できるよう柔軟に、かつ包括的に働くことができるようになる。どのように言語や文化の壁をのりこえることができるのか話す。どのように生徒たちの文化について学んだのか、についても。サービスラーニングは相互作用があるのを思いだして。私たちは生徒たちから学ぶべき。人によって共有されたり導入されたりする文化は違う。

 私たちはどのようにコミュニティに入るための方法としてCPYを利用するのか話す。なぜなら、彼らは構成されたメンバーだから。私たちは生徒たちの役にたつようにCPYを手伝おうとしている。新しい文化を紹介する一方で、私たちは彼らから学ぼうとし、彼らのコミュニティを尊敬したいと思っている。コミュニケーションをとる方法や、問題を解決する方法はたくさんあるということを理解する。また、文化を拒絶するのではなく、融合するよう努力する。生徒たちをより平等にするため、コミュニティと理解を変えることができる方法を考える。私たちのグループには生徒たちの全員はメキシコ系なので、生徒は日本の文化を勉強しながら、私たちは生徒の文化や日常生活を勉強して交換できました。

**学んだこと**

 最初に、毎回のレッスンは生徒の全員に合わないので、体を動かすアクティビティと何かを作るアクティビティを両方したら、子供たちは参加したくなることを学んだ。次に、子供たちの言いたいことも意味があるということを感じさせることが必要であり、子供たちは勉強のに対して強さを示さないことも勉強になった。